

花は遐年を契る

土田龍太郎

榮りに匂ふはただ束の間にて、咲けばかつ散る櫻花の見るにいとほかなくのどけからぬさま、諸行無常のことわりもて説かむはさすが言古りにたれば、そをまた言はむもかひなかるべし。去年の花とくうつろひてやうやく日月経るままに、まためぐり来る春のころ、待ちかねたりし櫻の花の色に出づるはおほかた年ごとのならひなれども、これまことはくすしき造化のはたらきのおのづからしからしむるに異ならねば、人智もてされに測るまじく人爲もていかにもしがたきはさらに言はでもありなむ。さはれよしやかりそめの思ひなしにてもあれ、もし草木にも情ありとせば、春ごとの花の訪れ、あたかも人にかねて誓へりしにもいたれば、かたみに心通へるがごとくにて頼もしき方たえてなしとしも言ひがたかるべし。ことに昔より花契遐年いふ題にて歌詠むためし少からず。そが中に今も賞づるにたへたるものさへうちまじれるはいともやさしきわざになむある。

契あれやまつに櫻の花の春

(令和二年九月二十五日受附)